



無農薬・ 有機野菜作りに 汗する仲間たち

人の輪が広がる「見沼田んぼ福祉農園」

さいたま市の中央に広さ二二六〇ヘクタール、
千代田区ほどもある大緑地帯「見沼田んぼ」がある。
その一画「見沼田んぼ福祉農園」では
さまざまな世代が農作業を楽しんでいる。
左:ロータリークラブの畠。畠ごとに違う作物が育つ



十三年かけて 実現した農園

「見沼田んぼ」は太古は海、そして湖沼、湿地へと姿を変え、江戸期将軍吉宗の時代に水田として開拓されました。また、サトイモの产地としても知られ、

見沼特産・すいき(サトイモの葉柄)の皮をむく学生ボランティアたち

江戸の料亭に送られていました。その役割は食料生産のみに留まらず、豪雨の際に水没するほど水を湛えることで、江戸の町を水害から救つていたといいます。現代でも台風の際は、雨を湛え下流域を守っています。

この農地に、減反政策や農業従事者の高齢化などとともに新たな問題が生じてきました。

農地以外に転用ができないため、耕作が放棄されると荒地化し、ゴミや廃土の不法投棄などが目立つようになります。そこで県によるいくつかの土地利用計画が試みられた末、平成十一年春、「見沼田んぼ福祉農園」が開園しました。農園代表・猪瀬良一さん(五十八歳)は、この福祉農園構想の発案者です。

「以前、妻が浦和市の小学校教諭をしていたのですが、妊娠を機に東京から浦和に移り住みました。生まれた長男が心にハンデを負っていたので、長男の自立の場として『農』を考えると共に、見沼田んぼを保全するため

にも『福祉農園』を県に提案したのです」

猪瀬さんの提案は昭和六十一年のことでした。行政側の反応はありませんでしたが、猪瀬さんは行政の担当者が代わるたびに提案し続けました。そしてようやく十三年後、県の担当者が眼に留め、「見沼田んぼ福祉農園」が開園したのです。

猪瀬さんたちは投棄されたゴミを除き、排水工事を施し、堆肥をすきこんで土を回復させていきました。その結果、景観や防犯など周辺の環境はよくなり、近隣の農家も農業指導や手伝いをしてくれるようになりました。

平成十三年、次男の浩平さん(現二十九歳)が大学を卒業して農園に参加するようになると、若手ボランティアの力が結集し、農園全体の管理や環境整備なども充実していったのです。現在、ボランティア団体、さらに昨年春には地元の浦和北ロータリークラブが加わって、七団体、

約100名の人たちが農作業に勤しんでいます。浩平さんは農園への思いを話してくれました。

「首都圏ゆえに環境や農業に関心をもつ若い人が大勢参加してくれる。その中から農業後継者も生まれるだろうし、就農しなくても理解ある消費者になれる。さらに野菜づくりや農作業

苗を植えるパン焼き工房の女性はロータリーの紹介で参加しているという





畠でバーベキューの昼食。気分はトム・ソーヤ

という目標に共に汗を流すこと、ハンデをもつた人に、「福祉」を意識せずに仲間として手を貸す習慣も身につきます。そんなお互いさまの気持ちが広がることで、ややもすると失われつつある共同性が少しでも甦ればと思います」

資金援助よりも 共に汗する支援を

平成十八年五月、農園で盗難事件が発生し、県や地元のメーカーが提供してくれた耕うん機など大量の農機具が盗まれました。浩平さんはこう話します。

「それまで使っていた耕うん機は、万人が使えるようにユニバーサルデザイン化されていて、私の兄でも安心して使えたのです。レバーから手を放せば止まるので暴走の心配もないし、誰にでも扱えるシンプルさが嬉しい。使いやすかつただけでなく、畠づくりの仲間として愛着をもつて使いこんだ機械だけに、失

ったのは悲しかったですね。でも幸い同じメーカーさんがまた新しい耕うん機などを提供してください、救われました」

浦和北ロータリークラブでも盗難事件を知り、すぐに資金援助を申し出ました。しかし、猪瀬さんからは意外な言葉が返ってきたのです。ロータリークラブの古澤建治さん（六十歳）にその折のことを聞きました。

「盗難の記事を読んで資金援助

を申し出たのですが、猪瀬代表はお金よりも一緒に汗を流しませんかと提案されたのです。私は農業に関心がありましたし、ロータリーとしても地元に貢献しているという達成感のある事業をしたかったので、経営者ばかりの素人ですが農園に参加することにしました」

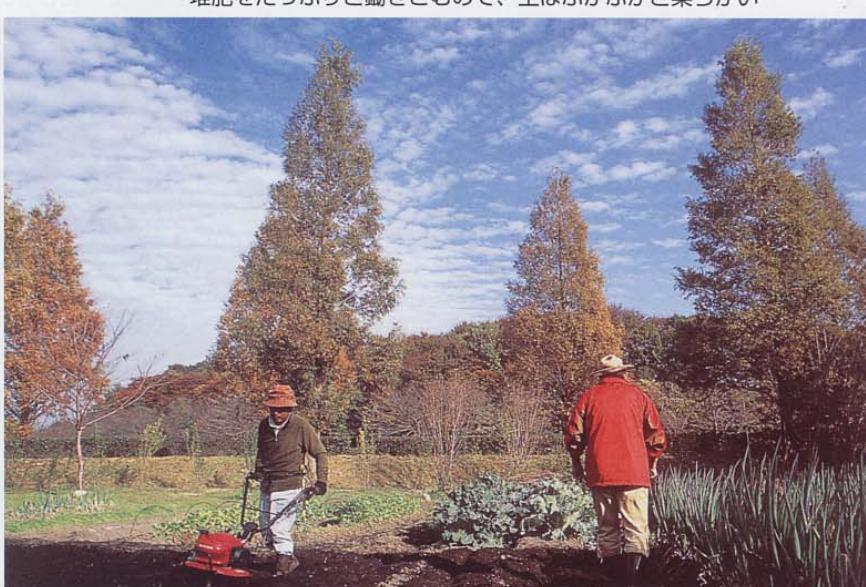
ロータリーの会長・福田剛紀さん（四十一歳）も、

「こういうプロジェクトがあるとロータリーの縛が生まれて結構力が高まります。見沼の環境をよくするための農作業は古澤

さんたちに任せて、私はひたすら予算をとるだけですが、将来は農作業をしてみたい」と語ります。ロータリークラブの参加を猪瀬さんは殊の外、喜んだそうです。

「こうした活動は次の世代に繋がっていくかないと意味がない。そのことをロータリーさんはよく理解されています。しかも、若いボランティアたちは大人や

堆肥をたっぷりと鋤きこむので、土はふかふかと柔らかい





写真上：灌木や資材を運ぶために運搬機は欠かせない
下右：電動チェーンソー。ライフラインの敷設が許可されないので発電機が大活躍
左：かつてはゴミの山だった芝生広場。いまは福祉団体や地域の人たちの交流の場

万円、小松菜一把千円くらいの高値です」と笑います。売上は全額、福祉農園に贈呈されるとのこと。収穫の手間も大変ではと問うと、「最近は賢くなつて、毎日収穫しなくともいい作物を作るようになりました。でも、イチゴを

うち一日はここで畠仕事をしますから、休めるのは週一日だけです。ゴルフにも行きますから、会社の仕事を社員任せ。よくできました社員ばかりで感謝しますよ」畠には、スーツを脱いだ経営者たちの気心の知れた笑い声が絶えませんでした。

地域社会との繋がりが弱いので、ロータリーのような町を作つている大人の人と協働できるのはとてもありがたいのです。福祉を声高に叫ぶのではなく、安心して生きていく町を汗して作つてくれる人が大事なのです。やつと望む人材に出会えたという感がしましたね」(猪瀬さん)

仕事をリタイアしたシニア世代もボランティアとして参加しています。その人たちはリタイ

ア後の人生を自分のために送る
だけでなく、社会貢献をしたい
と望んでいます。シニアには人
の上に立った経験者が多く、若
者への接し方がうまい上に、人
生の先輩としての知恵が若い人
たちに大いに役立つとのこと。

お買い上げ

小松菜一把千円で

小松菜一把千円で
買へ

「よく言えば多品種少量生産なのですが、悪く言えば意見がまとまらない、自己主張の賜物ですね。畠をやりだすといろいろ

「初めは家内が菜園をしていましたが、私もやつてみたらおもしろい。すっかりはまってしまって、いまは一〇〇坪ほどの畑を

す。この日はタマネギの苗の植え付けと畑の堆肥入れが目標。畑には一畝ごとにネギ、小松菜、ブロッコリー、キャベツ、白菜、大根等々、さまざまな作物が育つています。ロー・タリー前会長の吉田一也さん(五十四歳)は、

と話すのは古澤さん。五年ほど前から独自に家庭菜園をしている兼光利之さん（五十九歳）も農作業は樂しいと語ります。

一タリークラブの“烟担当”的面々が集まりました。企業の現

つい植えてしまったのですが、これは毎日収穫しないといけないのでもう二点つづいて。